

面白い本。

オスマン帝国後のサイクス・ピコ協定（密約）、北方領土とヤルタ会談の極東密約、日ロ北方領土交渉と「ダレスの洞喝」、「北方領土問題」＝アメリカは日本とロシアが結びつかないように打ち込んだ楔（くさび）。中国の「第1列島線」と「第2列島線」、オスマン帝国領に対するサイクス・ピコ協定。

プーチンは、「地政学的な問題は、イデオロギーとは何の関係もない」とはっきり述べています。イデオロギーという理想的な物情で括られる時代は終わって、かつての帝国主義時代のように、現実的で実践的な地政学で考えなければいけない時代になっているということです。

地政学とは「欧米の帝国主義と結びついて発展した理論」といえます。

ハート・ランドは、ユーラシア大陸の中心部で、ロシアの領域です。「ハート・ランド理論」はこれから本書で何度も出てきますが、かんたんにいうと、「ハート・ランドを制するものは世界を制する」という考え方になります。

地政学では、「バッファゾーン（緩衝地帯）」という考え方も重要です。

バッファゾーンとは、いわば大国と大国のあいだにはさまれた中間地帯です。

大国は、敵国からの直接の侵攻を防ぐため、周辺の地域をバッファゾーンにとらえ、その地域を影響下におこうとします。しかし、ほかの国もバッファゾーンに干渉してきますので、衝突が起きやすくなります。つまり、**バッファゾーンでは大国と大国の代理戦争が起き、紛争地域になることが多いです。**

重要なのは、北のハート・ランドと南のハート・

ランドには含まれた地域です。なぜなら、この地域をおさえることができれば、南北2つのハート・ランドに影響を及ぼすことができるからです。

では、南北のハート・ランドのあいだにあるのはなにかというと、アラビア半島です。アラビア半島のアラビア砂漠は、昔から隊商貿易などが行われていたことからわかるように、通行が比較的容易なので2つのハート・ランドを行き来するには都合がいいです。ですから、地政学的にはアラビア半島をおさえることがとても重要になります。

マッキンダーはこのことを石油資源が大量に発見される前から指摘していました。つまり、**アラビア半島は石油資源があるから重要なのではなく、地政学的な理由から重要なのです。**

グレート・ゲーム 力を持つ大国同士が演じる覇権争い

現代のグレート・ゲームの舞台は中東・アラビア半島

軍事用語

タスクフォース（機動部隊）

ヘッドクォーター（司令塔）

戦後のアメリカは、世界各地に軍事拠点をおき、シー・パワーとともに空軍のエア・パワーを展開しました。「世界の警察官」を自任し、あちこちに目を光らせました。

そして、**善悪二元論のロジック**で「悪」の勢力を見出しては、「自由・人権・民主主義」を守るという口実でいくつもの戦争に関わります。冷戦時代は「ソ連」、9・11以降は「イスラム過激派」が「悪」です。「正義のために悪をたおす」という構図は一見すると正当に見えますが、そこには多くの矛盾もはらんでいました。

ベトナム戦争は、ソ連が支援する北ベトナムが南北統一をめざしたのに対し、アメリカは「アジアでの共産主義の拡大を防ぎ、自由と民主主義を守る」という口実で参戦しました。アメリカは南

ベトナムを支援し、**50万人もの地上軍を投入**しました。しかし、北ベトナムや南ベトナム解放民族戦線が展開するゲリラ戦に苦戦し、撤退を余儀なくされます。

・・・

しかし、シー・パワーで世界覇権を狙うアメリカにとっては、**朝鮮戦争とベトナム戦争はどうしてもさけられない戦争**でした。ソ連のリム・ランドへの進出は絶対に防がないといけませんし、ユーラシア大陸周辺の拠点をつないで、マージナル・シーとリム・ランドを支配するには必要だったのです。

クウェートは、イギリスが石油利権を手に入れるために人工的につくられた国です。

ところで、地政学のルールに、「**引いたら、押される**」というものがあります。オバマ政権の孤立主義によってアメリカは引きました。すると世界各地で反米勢力が勢いづきました。

中国は東シナ海・南シナ海に進出し、ロシアはクリミアを併合し、ウクライナに勢力を拡大しました。米軍の撤退でイラクとシリアが内戦状態になると、そこにイスラム過激派の**IS**（イスラム国）があらわれました。

これがまわりまわってアメリカを直撃します。難民問題やテロが欧州からアメリカに飛び火したのです。

そしてトランプは、同盟関係の再構築を考えています。アメリカばかりが戦うのではなく、同盟国にもっと働いてもらおうということです。「世界の警察官」としてのアメリカが「**オンショア・balancing**」だったとすれば、トランプの戦略は「**オフショア・balancing**」です。イギリスの伝統的な「**バランス・オブ・パワー**」の考え方と似ています。

つまり、すべてアメリカが介入しなくても、**沖合（オフショア）**からコントロールしながら、地域のことは地域のパートナーにまかせ、相対的に

アメリカに有利な勢力均衡が成立すれば、それによしとする戦略です。

この戦略が、トランプ大統領のいう「アメリカ第一主義」です。「アメリカ国民がもう世界のために犠牲になったり、お金を出したりしなくていい」という意味でのアメリカ第一主義です。

ウクライナはロシアと欧米の

中間のバッファゾーンにあるので、地政学的にどうでも紛争が避けられない運命にあるからです。

ソ連崩壊以降、東欧の国々はアメリカを中心とした軍事同盟・NATO（北大西洋条約機構）に加盟しました。その結果、NATO 勢力はロシアの目の前まで迫ってきました。ロシアと国境を接するバルト 3 国のエストニアやラトビアは、**NATO の加盟国**です。残りはウクライナとなりました。東西の境界線がウクライナにまで移動してきたのでここで紛争が起きた、ということです。

プーチンは、絶対にウクライナから引くことはできません。クリミアからウクライナ東部にかけて軍を展開し、西側ににらみをきかせようとしています。一方、西側諸国はロシアに経済制裁をかけて圧力を強めています。

・・・

とくに自前のエ

ネルギー資源をもたないドイツやイタリアは、このロシアのエネルギーをたよりにしています。**ドイツはロシアの天然ガスをもっとも輸入している国**です（2 番目はトルコ）。ですから、ドイツはロシアとの交渉役になっていますが、エネルギーを依存しているため、あまり強気には出られないのです。

さいごまで時間がかかったのは、アムール川とウスリー川の合流点にある大ウスリー島など 3 島の帰属です。ここは 1929 年からロシアが実効支配していたので、ロシアが引くことはないと思われていました。ところが 2004 年、プーチン

と胡錦濤の会談では、「フィフティ・フィフティ」方式で解決しています。単純に中州を面積で半々にすることになったのです。これで両国間の国境はすべてクリアになり、2008年に正式に国境が画定しています。しかし、なぜプーチンは面積等分で妥協したのでしょうか？

1つには、台頭する中国とのあいだにある争いの種をつぶしておきたかった、というのがあります。ロシアの伝統的な戦略は、相手が弱いときには押しますが、強いときには引くというもの。プーチンはこの伝統にしたがい、中国と不要に対決するリスクを避けたのです。

もう1つには、極兼・シベリアの開発のために中国の成長を取り込みたかった、という思惑もあります。実際、国境画定以降、中国との経済的な結びつきは強まっています。シベリアから中国向けの石油パイプラインがつくられ、2011年から中国向けに石油が輸出されています。

しかし1945年8月、ソ連（ロシア）は無条件降伏をした日本に攻め込み、南樺太と千島列島を占領しました。「日本の領土には攻め込まない」という日ソ間の約束もやぶりました。このときの侵攻は、「ソ連が日本に侵攻する見返りに、南樺太と千島列島の獲得を約束する」という**ヤルタ会談の極東密約**によるものです。

ソ連にとって日本はリム・ランドにあたります。ここを足がかりにマージナル・シーをおさえ、太平洋へ進出したいところです。しかし、アメリカがこれをゆるしません。アメリカは日本とロシアが結びつかないように、楔(くさび)を打ち込みました。それが「北方領土問題」です。

アメリカは、サンフランシスコ講和条約でわざと千島列島の帰属をあいまいにして「北方領土問題」をこしらえました。サンフランシスコ講和条約を見てみると、日本は「千島列島」を放棄した事になっていますが、「千島列島」の範囲が明らかにされていません。

・・・

1956年の日ソ交渉では、「二島（歯舞・色丹）返還」でまとまりかけました。ところが、アメリカのダレス国務長官が日本に対し、「国後・択捉

がソ連のものになるなら、沖縄はアメリカのものになる」という趣旨のおどしをかけてきました。有名な「**ダレスの洞喝**」です。これで二島返還実は消えました。

その後の交渉では、「領土問題は存在しない」と主張するソ連と、「四島一括返還」を主張する日本とのあいだで議論がかみあわず、進展は見られませんでした。

「新疆」とは、中国に入れられた「新しい領土」という意味です。

鄧小平時代に打ち出された海洋戦略上の概念が、「**第1列島線**」と「**第2列島線**」(P109)です。

「第1列島線」と「第2列島線」は、もともとはソ連への備えから考え出されたものですが、ソ連が崩壊してからは、「対米防衛線」として重視されるようになりました。

第1列島線は、沖縄から台湾、フィリピンを結ぶラインです。第2列島線は、小笠原からグアム、サイパンまでを結ぶラインです。

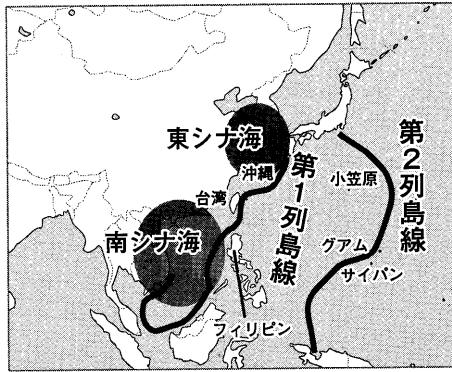
計画は遅れていますが、2010年までに第1列島線をおさえ、2020年までに第2列島線をおさえるというプランです。

尖閣諸島への領海侵犯や南シナ海への進出は、この第1列島線のプランにもとづく行動です。

ただ、これはあくまで「対米防衛線」ですので、この海域をすべて実効支配するという意味ではありません。米軍に出ていってもらわなければならない。つまり、沖縄やグアム、サイパンのアメリカの海軍に撤退してもらい、かわりに中国海軍を展開したいと考えています。

2007年、中国海軍幹部はアメリカ側に「ハワイより東を米軍、西を中国海軍が管理しよう」と持ちかけたといわれていますが、これがシー・パワーの中国がめざしている姿です。

中国の第1列島線、第2列島線



第1列島線…沖縄、台湾、フィリピンを結ぶライン
第2列島線…小笠原、グアム、サイパンを結ぶライン

ドイツは、資源が豊富にあるわけではありませんが、モノづくりが得意で、機能性とデザイン性を兼ね備えた良質な商品をつくります。その販売先はEUの国々です。通常、国境をこえてモノが移動するときは関税がかかりますが、「人・モノ・金」の移動が自由なEUでは「関税ゼロ」です。つまり、輸出入がしやすいのです。良質な輸出品をもっているドイツにとっては好都合です。

また、**実力よりも相対的にユーロ安**になっていることもポイントです。通常、黒字の国の通貨は評価が高くなり、輸出が不利になりますが、共通通貨ユーロはほかの赤字の国と共有されるので、本来の実力よりも「ユーロ安」になります。ユーロ安を武器に輸出が好調となり、ますます経常収支は黒字となるのです。

共通通貨ユーロには、「**黒字の国はますます黒字を拡大し、赤字の国はますます赤字を拡大する**」という、格差拡大のシステムが隠されています。

ちなみに、ギリシャとロシアは、「**正教会の仲間**」です。キリスト教会は4世紀末のローマ帝国の東西分裂にともない東西にわかれ、**東ローマ帝国のキリスト教会は「ギリシャ正教会」と呼ばれる**ようになりました。この正教会の1つが「ロシア正教会」です。ギリシャとロシアは宗教的なつなが

りが深いのです。

フランスは、移民に寛容な国です。フランス共和国の理念である「自由・平等・博愛」の精神を共有する者ならば、国家の一員として受け入れるという考えです。つまり、どこの出身で、どんな宗教を信じていても、フランスの言語と文化を受け入れるのならば、国家の一員として認めるのです。このような同一化政策の結果、イスラム教徒の数は推計 500 万人にまでふくれあがりました。これはヨーロッパ諸国でも最大規模です。

理念は素晴らしいですが、現実には厳しい側面もあります。表向きは「平等」を謳いながら、学校・職場でのイジメや就職差別など、社会のなかには人種や宗教を理由とした「差別」が厳然と存在しています。差別によって就職できない、安い労働を強いられる、貧困で子どもにいい教育を受けさせられない、子どもも就職できない、という貧困の連鎖も生じています。

差別を受け自分の居場所を見つけられない移民の若者たちが、ネットで IS（イスラム国）の宣伝ビデオなどを見たら、どう感じるでしょうか。そこに自分の居場所を感じてしまうかもしれません。フランスでホームグロウンテロを生む背景には、こうした移民社会ならではの構造があります。

ところが、プーチン大統領の登場で、ロシアは帝国主義的なナショナリズムを復活させました。その最たる例が、2014 年 3 月のロシアによるクリミア併合（ウクライナ危機）です（P80）。ロシアは、戦後の国際社会のルールをやぶって、力によって領土を拡大してきました。しかも、ヨーロッパのアキレス腱であるヨーロッパ半島の付け根に進出してきたのです（P120）。

IS とは、スンナ派の過激派武装組織です。スンナ派というところがポイントです。

イスラム教には、シーア派とスンナ派があります。基本的に、シーア派とスンナ派は争いますが、

シーア派同士、スンナ派同士は争いません。

・・・

ムハンマドのあとの4代は、選挙によって公正に後継者（カリフ）が選ばれました。アブー・バクル、ウマル、ウスマーン、アリーと平穏につづきました。ところが、4代目のアリーは、ウマイヤ家に暗殺され、ウマイヤ朝が建てられました。ウマイヤ朝では、選挙ではなく世襲制となりました。

じっは、この4代目のアリーはムハンマドの従兄弟です。4代までのカリフのなかでは唯一、ムハンマドと血のつながりがありました。しかも、ムハンマドの娘を嫁に迎えています。

だから、正式な後継者はアリーである。アリーの子孫が正統である。こう考えるのがシーア派です。アリーの子孫は12代までつづいたとされますが、シーア派では、アリー以降の12代を「イマーム」（指導者）と呼んでいます。

一方のスンナ派は、選挙で選ばれた最初の4代こそが正統なカリフであるとしています。「スンナ」とは『コーラン』に継ぐ経典の名称です。スンナを重視する人たちということで「スンナ派」です。

血統を重視するシーア派に対し、経典を重視するのがスンナ派ということになります。イスラム教徒全体では、9割がスンナ派、1割がシーア派です。スンナ派が多数派です。

ISは、スンナ派です。スンナ派では、血統は関係ありません。カリフと名乗り出て、みんなに認められればカリフになれるわけです。

オスマン帝国

崩壊以降、欧米の手のひらの上で動かされてきた中東諸国は、自分たちで統治する力がなかったのです。ましてや、サイクス・ピコ協定で人工的につくられた国ですから、「自分はイラク人」などという意識が薄く、自分の国を立て直すという意欲がありません。ですから、ただ宗派对立や部族紛争が噴出するだけで、混乱が深まりました。

その結果生まれたのがISだった、ということになります。

かつての中東は安定していました。オスマン帝国がしっかり統治していて、宗派对立も民族対立もほとんど起きませんでした。

ところが 20 世紀初頭、中東方面への進出をうかがうロシアとドイツがぶつかります。ドイツの台頭を嫌うイギリスとフランスはロシアと手を組み、オスマン帝国はロシアの南下政策を防ぐためドイツと手を組みました。こうして第 1 次世界大戦が勃発しました。

大戦はオスマン帝国が不利となります。すると 1916 年、ロシア・イギリス・フランスは、戦後のオスマン帝国領をどうするか、あらかじめ決めておこうということで、サイクス・ピコ協定を結びました。

その内容は、地図上にただ定規で線を引いたようなしろもので、民族や宗教の分布をまったく無視したものでした。それがほとんどそのまま実行されたので、いまのシリア・イラク・ヨルダンあたりの国境線は、ほとんど直線になっています。

フランス領は、シリアやレバノンです。シリアには、内陸部にはスンナ派、地中海沿岸部にはシーア派（アラウィ派）やキリスト教徒がいました。イギリス領はイラクです。シリア国境に近い西部にはスンナ派、ペルシア湾に面した南部にはシーア派、北部にはスンナ派のクルド人がいました。ロシア領は、トルコのイスタンブールとアナトリア、ダーダネルス・ボスポラス海峡のあたりということになりました。

ロシアのアサド政権(シリア)支援は、イランに対する牽制の意味もあります。イランもアサド政権支援に力を入れているからです。シーア派の総本山ともいえるイランは、スンナ派の IS をつぶすためアサド政権を軍事的、経済的に支援しているのです。

しかし、ロシアにしてみると、イランの影響力が拡大し、シリアがイランの保護国のようになっては困ります。だからロシアは、アサド政権に対する支援をより手厚くし、イランの影響力拡大を防ごうとしています。

・・・

自

信を回復したアサドは、激戦地アレッポを取り戻し、さらにシリア全土を再び手に入れる野心を見せています。

ISの衰えをよく思っていないのは、トルコです。トルコは、クルド人問題からISには生き残ってほしいと思っています（P182）。

チェチェン人のなかにはイスラム急進派としてアサド政権と戦っている人たちも多数います。そんな屈強な戦闘員がアサド政権を倒した勢いでロシアに戻ってきたら、国内が不安定になります。再びチェチェン紛争のような事態が発生しかねません。

ですから、**ロシアはアサド政権がたおれてしまっただけでは困るのです。**

また、シリアには化学兵器やミサイルが管理されているし、**ロシアが中東で唯一使用できる海軍基地タルトゥース**があります。これらを失わないため、ロシアはアサドを支援するのです。

では、**なぜイランはシーア派なのでしょう？**正統カリフ時代をへて、スンナ派のウマイヤ朝帝国ができたとき、ペルシア帝国（ササン朝）は滅びました。このときアラブ人に支配されたペルシア人は、イスラム教を受け入れました。しかし、輝かしい古代の歴史を誇るペルシア人のプライドから、言語や文化まではアラブ化されることはありませんでした。

16世紀、イラン高原に成立したサファヴィー朝が成立します。この王朝は、サファヴィー教団がもとになっていますが、その教義はシーア派の教義となじむことからシーア派が採用されました。ここからイランはシーア派の国となったのです。

シーア派のサファヴィー朝は、スンナ派のオスマン帝国（トルコ）と中東の覇権争いをしました。その舞台となったのが、いまのイラクあたりです。**イランとトルコは、ISのいるイラクをめぐる立っていますが、昔から同じことをやってきたわけ**です。

イラクは、古代メソポタミア文明が発祥した豊

かな土地であるうえ、周辺の高台から見下ろす位置にあるので敵に狙われやすい運命にあります。ペルシア人やトルコ人だけでなく、クルド人、ギリシャ人、ローマ人、アラブ人がかわるがわる侵入して争ってきた歴史があります。**地政学的にグレート・ゲームの場になりやすい**のです。

サウジアラビアは、はじめは**ISを敵**として激しい戦闘を繰り広げていましたが、アメリカとイランが手を組んで、**打倒IS**で攻撃してきたことから、**戦略を転換**しました。シーア派のイランが**IS**を倒してイラクに進出してくれば、その勢いでアラビア半島もねらってくるでしょう。イランは聖地メッカとメディナをほしいと思っているからです。ですからサウジアラビアは、まずは**イランの脅威をはねかえすため、同じスンナ派のIS支援にまわった**のです。

クルド人は、「国をもたない世界最大の民族」といわれています。クルド人は、シリア、トルコ、イラク、イランなどにまたがる地域に住んでいて、人口は4500万人ほど。クルド人が最後に国家をきずいたのは、12～13世紀のアイユーブ朝です。例のサイクス・ピコ協定（P167）では、クルド人の扱いも問題になりましたが、結局、いくつかの国に分割されることになりました。

クルド人に独立のチャンスがめぐってきたのは、イラク戦争のときです。イラクのクルド人はそれまでフセイン政権に抑えつけられていましたが、フセイン政権崩壊で一時的に解放されました。しかし、そのあとに**IS**が出てきたので、これを倒そうということになりました。そのとき手を組んだのがアメリカです。**アメリカは中東にリスクの高い地上軍を投入したくないので、クルド人の兵隊を応援することでIS壊滅をはかった**のです。

もしクルド人の活躍によって**IS**をたおすことができれば、その見返りにクルド人の独立が認められるということもあるかもしれません。これをいやがっているのが、トルコです。

トルコの東側にはもともとはクルドの領土があつて、いまもクルド人が住んでいます。もしイラクでクルド人が独立すると、トルコのクルド人も自治区を求めて活気づくかもしれません。トルコはこれを恐れています。もう1つ、トルコが恐れているのがイランです。トルコとイランは昔から中東の覇権争いをしてきたライバル同士ですが（P175）、対IS作戦に乗じてイランまでもが勢力を拡大してきたら厄介です。

もし中央アジアに第2のISが生まれるとなると、もっとも困るのは中国です。新疆ウイグル自治区やチベット自治区の分離独立運動に火がつくかもしれないからです。

どういうことなのか見てみましょう。

中央アジアの「権力の空白地帯」とは、**フェルガナ盆地**です。ここはほとんどがウズベキスタンの領土にあたりますが、ウズベキスタン本土とは山岳地帯で隔てられていて、飛び地のようになっています。平野を通して入るには隣国のタジキスタンを通らないといけません。また、フェルガナ盆地の周りには、タジキスタンとキルギスの飛び地もちらばっています。

つまりこのあたりは、とても複雑な国境線になっているのですが、なぜこんなことになったかという、旧ソ連領時代のスターリンの仕業です。

ここにはもともと国家がなく、いろいろな民族が共存していました。ところが、**スターリンは複雑な国境線を引いて、民族ごとに分割し、お互いに争わせるようにしたのです。**いわば「分割統治」です。被支配者を分割して互いに争わせることで、統治者に対する反抗心をさける方法です。分割統治は、フランスの国王ルイ11世があみだしたといわれる古典的な統治技術です。

ソ連が崩壊し、3国が独立したとき、国境線はそのまま引き継がれました。それによってこのフェルガナ盆地周辺は、国境線や飛び地の帰属をめぐる争いがたえない地域となりました。しかもフェルガナ盆地は、周りを天山山脈の高い山に囲まれていて、武装組織が身を隠しやすい地形です。国家レベルの軍事力をもってしても安定的に

配するのは簡単ではありません。ですから、さまざまな勢力が入り乱れて争う「権力の空白地帯」となったのです。

そして、この権力の空白地帯を埋めるようにして、第2のISができるかもしれないといわれています。

中国は、東南アジアのなかでは「カンボジアとラオスを支援して、ベトナムやフィリピンと対立する」という構図になっています。

そして戦後の1947年、インドは独立します。このとき、もともとイスラム教徒が多かった北西部のパンジャーブ州と東部のベンガル州はインドから切り離され、パキスタンとして独立することになりました。さらに東パキスタンは1971年にバングラデシュとして独立します。

この宗教をベースとした分離独立は、紛争の火種となりました。それが**カシミール紛争**です。

インド最北部のカシミール州はイスラム教徒が多く、住民はパキスタン帰属を望んでいたにもかかわらず、インド領となってしまいました。これが発端となって、インドとパキスタンの両軍が領有権を主張して介入する印パ戦争が繰り返されるようになったのです。

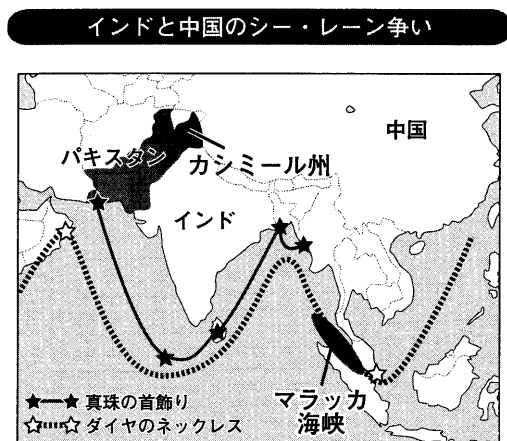
インドに対抗しなければいけないパキスタンは、アメリカと同盟しました。一方、イギリスが撤退して空白地帯となったチベットには、**中国が侵攻**してきました。さらに**中国は、インド東北辺境地区とカシミール州に侵攻**します。中国とパキスタンは、対インド攻略で利害が一致しているので手を組みました。

アメリカが支援するパキスタンと中国に包囲されたインドは、ソ連に助けを求め、軍事同盟を結びました。そして中国に対抗して核武装しました。これによって中国とインドの対立は表面上は落ち着きましたが、ただこんどは、インドに対抗してパキスタンも核を保有しました。核開発の連鎖が

起きたのです。

インドと中国は潜在的にライバル関係にあります。同じユーラシア大陸の大国で、国境を接し、人口も同程度。急成長する経済でも争っています。

その中国が進める対インド戦略が「真珠の首飾り」です。中国は原油の海外依存度が5割を超え、ほとんどは中東・アフリカ方面から輸入しています。そのシー・レーンは、インド洋からマラッカ海峡（P208）を経由するものですが、マラッカ海峡はアメリカがおさえているので、ここを阻止されたら中国は大きなダメージをうけます。これが「マラッカ・ジレンマ」です。



インドは、中国の「真珠の首飾り」への対抗策としてアメリカや日本と協力した「ダイアのネックレス」を展開